

〈レポート〉

取材協力・写真提供：武田薬品 京都薬用植物園

取材・構成：切江志龍、服部円

武田薬品 京都薬用植物園 × 『文化と生物学』編集部

「化粧」にまつわる植物ノオト

「化粧」にはさまざまな植物が用いられてきた歴史がある。現代の化粧品に使われる植物もあれば、使い方によっては激しい毒性を示す植物や医薬品として知られる植物などがある。90年以上前から、絶滅危惧種を含む重要な薬用・有用植物資源の収集・保全をおこなっている武田薬品 京都薬用植物園の協力のもとに、「化粧」にまつわる植物を紹介する。



Figure 1. 「日本薬局方」収載生薬の基原植物。

本記事では『文化と生物学』編集部が「化粧」にまつわる書物をもとに選出した植物を「日本薬局方」「日本薬局方外生薬規格」「その他（伝承含む）」の3パートに分けて紹介する。「日本薬局方」は、公衆衛生の確保に資するため、学問・技術の進歩と医療需要に応じて、日本の医薬品の品質を適正に確保するために必要な規格・基準及び標準的試験法等を示す公的な規範書のこと。100年有余の歴史があり、初版は明治19年6月に公布され、今日に至るまで医薬品の開発、試験技術の向上に伴って改訂が重ねられている。「日本薬局方外生薬規格」は、医薬品各条に規定する医薬品について、その本質、製法、生薬の性状、品質及び貯法等に関する基準を定めたもの。これらの基原植物以外を「その他（伝承含む）」とする。[1]

「日本薬局方」収載生薬の基原植物

A. ベラドンナ

Atropa belladonna L. ナス科

向精神性の化学物質を含み正常な神経伝達に影響を及ぼすことから、“魔女の軟膏”の成分として知られている。“魔女の軟膏”は使用者に飛行感覚や動物への変身といった幻覚をもたらす。こうした作用に関する研究から、アルカロイド類についての科学的知見の蓄積や現代西洋医薬への応用がすすんだ。[2]

編集ノート：黒目（瞳孔）を大きくみせるために散瞳剤としてクレオパトラが用いていたという説がある。[3]

B. ヤブツバキ

Camellia japonica L. ツバキ科

北海道を除く日本全土（青森県の夏泊半島に自生するもの、日本海側では秋田県・男鹿半島の能登山が北限とされる）、朝鮮半島の南部および台湾の北部だけに自生する。花は基部の癒合した筒咲きで、花糸は長く白色。花は萎れないうちに落ちる。葉は厚く光沢があり、葉柄は長くて無毛である。

編集ノート：椿油としてヘアケアなどに使われることがある。[2]

C. トウガラシ

Capsicum annuum L. ナス科

中南米に分布する多年草で、日本には安土桃山時代以降に渡来し、江戸時代中期から広く栽培されている。果実に含まれる辛味成分のカプサイシンは胎座と呼ばれる種が付く器官で形成される。辛味性健胃薬や筋肉痛、しもやけなどの局所刺激薬のほか、香辛料として料理にも広く使われている。

編集ノート：カプサイシンは血行促進のために用いられる。[4]

D. ベニバナ

Carthamus tinctorius L. キク科

エジプトに分布する一年草で、草丈は1m前後まで伸び、6月下旬～7月上旬に開花する。日本では平安時代中期に作られた法典『延喜式』（927年）に登場し、江戸時代になると山形県の最上地方での栽培が盛んになり、品質の高い紅花として非常に珍重された。葛根紅花湯（かっこんこうかとう）などの一般用漢方製剤に使われるほか、天然色素原料として食品や化粧品にも用いられる。

編集ノート：主に頬紅や口紅に使われる。[2]

E. セリバオウレン

Coptis japonica (Thunb.) Makino var. *major*
(Miq.) Satake キンポウゲ科

日本特産の常緑多年草で本州、四国の樹林下に自生している。根茎は短く、地中を斜めに這い、黄味を帯びている。主に乾燥した根茎を生薬「オウレン（黄連）」として使用する。黄連にはベルベリン（アルカロイド）が含まれ、消炎、止血などに用いられている。一般用漢方製剤に配合されるほか、胃腸薬、止瀉薬の原料としても広く使われている。

編集ノート：化粧水にニキビケアとして配合されることがある。[4]

F. ウラルカンゾウ

Glycyrrhiza uralensis Fisch. ex DC. マメ科
中国からヨーロッパ南部に分布する多年草。生薬として使われる「カンゾウ（甘草）」は、根とストロンを使用している。甘草には、甘味成分のグリチルリチン（トリテルペン配糖体）などが含まれており、去痰、鎮咳、消化性潰瘍薬などの作用がある。一般用漢方製剤では葛根湯（かっこんとう）など最も多い 212 処方にも配合されている。また、甘味剤として味噌や醤油などにも多用されている。

編集ノート：滋養強壮が期待され、化粧水にも用いられている。[4]

G. アンズ

Prunus armeniaca L. バラ科

中国北部に分布する落葉小高木で、世界各地で果樹として栽培されている。果実は核果（かくか）と呼ばれ、中心には硬い核があり、乾燥した核を割ると種子（杏仁）が出てくる。種子

には、青酸配糖体のアミグダリンを含み、去痰や鎮咳作用がある。一般用漢方製剤の麻黄湯（まおうとう）、麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）などにも配合されている。

編集ノート：美容クリームとして使われていたこともある。[3]

H. トウゴマ

Ricinus communis L. トウダイグサ科

北アフリカ原産の多年草。日本では越冬できないので一年草として栽培されている。種子を圧搾して得た脂肪油はヒマシ油として知られ、古代エジプトでは下剤などに用いられることがあった。現在はキャスターオイルとしてマッサージ、スキンケア、頭皮ケアなどの目的で多用されている。

編集ノート：頭髪用にポマードとして用いられていた。[3]

I. センブリ

Swertia japonica (Schult.) Makino リンドウ科

日本や中国などに分布する二年草。草丈は 10 ～ 20cm、初秋に白い星状の花をつける。スウェルチアマリン（苦味配糖体）などの成分を含み、全草に強い苦味がある。主に健胃薬や整腸薬に配合される。和名の由来は“千回煮出しても、まだ苦味が残っている”ことから名付けられたといわれる。

編集ノート：育毛剤に用いられることも。[4]

J. チョウジノキ

Syzygium aromaticum (L.) Merr. et L.M.Perry
フトモモ科

南太平洋のモルッカ諸島に分布する熱帯性の

常緑樹。高さは10mほどにもなる。18世紀末、フランス人によって東アフリカ沿岸地帯に移植されたものが発展し、現在はマダガスカル島などで世界市場の8割以上が生産されている。開花直前の蕾を採集・乾燥したものが生薬「チョウジ（丁子）」と呼ばれ、鎮痛作用のあるオイゲノールが含まれている。柿蒂湯（していとう）など一般用漢方製剤にも配合されるほか、防腐剤としても利用されている。

編集ノート：吹き出物やニキビに効果があるといわれる。[4]

K. キカラスウリ

Trichosanthes kirilowii Maxim. var. *japonica* (Miq.) Kitam. ウリ科

ウリ科の多年草。花は白く、レース細工のような繊細なかたちをもつ。赤い実を付けるカラスウリと異なり、黄色い実をつける。日本薬局方の「カロコン（栝楼根）」という生薬名でも知られており、解熱、止瀉、鎮咳に効果があるとされている。地上高くに結実することから「天瓜」とも呼ばれ、転じて「天花」とも書かれるようになった。[2]

編集ノート：天花粉（ベビーパウダー）として使われていた。[2]

L. ショウガ

Zingiber officinale (Willd.) Roscoe ショウガ科

熱帯アジアに分布する多年草で、草丈30～50cmになる。土の中で横に多肉質の根茎を伸ばす。根茎を湯通し又は蒸した生薬には、ジンゲロールなどの成分が含まれ、解熱、鎮痛、鎮咳、抗炎症などの作用がある。一般用漢方製剤などに用いられる。食用のショウガは変種のオオ

ショウガ (var. *macrorrhizomum* Makino) と呼ばれる変種である。

編集ノート：育毛剤やくすみ防止、エイジングなどに使われている。[4]



Figure 2. 「日本薬局方外生薬規格」 収載生薬の基原植物。

「日本薬局方外生薬規格」 収載生薬の基原植物

M. チャノキ

Camellia sinensis (L.) Kuntze ツバキ科

日本最古の記録は 815 年にさかのぼる。古くから眠気覚ましとして飲まれていた他、平安時代には漢方薬（ホオノキやショウガ）を入れて飲むこともあった [2]。遺伝子型の解析から日本のチャノキは主に中国中南部から伝来したと考えられているが、さまざまな系統が多数存在しており産地ごとの特性も多様。[5]

編集ノート：紫外線ブロックとしての効果が期待される。[4]

N. カミツレ（カモミール）

Matricaria chamomilla L. キク科

通称カモミールと呼ばれる、ヨーロッパから西アジアに分布する一年草。草丈は 30 ～ 60 cm の高さになり、5 ～ 7 月ごろに茎の頂端に直径 2 cm ほどの花を咲かせる。主として花にカマズレン、プロアズレン、ファルネセンなどの精油を含み、消炎・鎮痙作用がある。またハーブティーやアロマオイル、入浴剤などにも利用されている。編集ノート：ニキビ防止などの化粧品に配合されることもある。[4]



Figure 3. その他（伝承含む）の植物。

その他（伝承含む）の植物

O. ニュウコウジュ

Boswellia sacra Flueck. カンラン科

アラビア半島からトルコにかけて分布する常緑小高木。乾燥地帯に多く見られ、枝を真横に伸長させる。樹皮に傷をつけることで採取できる、固まった芳香性ゴム樹脂を「ニュウコウ（乳香）」と呼び、生薬や化粧品など広く使われている。乳香には強い抗菌作用や筋肉の痙攣を緩和する働きを持つβ-ボスウェル酸などが含まれている。また、最古の香料としても知られ寺院などで薫香料としても使用されている。

編集ノート：アイブrouに使われていた。[3]

P. パパイヤ

Carica papaya L. パパイア科

熱帯アメリカ原産の高木で 10m ほどになる。果実にはブドウ糖、果糖、蔗糖、酒石酸、リンゴ酸、クエン酸などを含み、ビタミン A、C が豊富で、栄養価が高い。生食するほかジュース、ジャム、アイスクリームなどにし、乾燥パ

イヤなども作られる。国内では、沖縄県をはじめとする栽培地では、青い果実を味噌漬けや油炒めにして食される。[6]

編集ノート：ボディペイントに使用されることがあった。[7]

Q. ヘンナ

Lawsonia inermis L. ミソハギ科

北アフリカ、西南アジアに分布する低木又は高木で、世界の熱帯アジアで栽培されている。花色は白又は淡紅色で香がよく香水に用いられる。本種の乾燥させた葉を粉末にして橙赤色に染めるヘンナ染料と呼ばれている。和名の「シコウカ（指甲花）」は爪（指甲）を染めるのに用いられたことに因む。さらにエジプトではミイラを包んだ布を染めた染料としても知られている。[6]

編集ノート：染髪やマニキュアなどに使用。[3]

R. ダマスクバラ

Rosa damascena Mill. バラ科

バラには様々な系統・品種が存在するが、

香水用にはダマスケナ種とセンチフォリア種 *R. centifolia* がよく用いられる。薬用バラの歴史は紀元前 12 世紀に遡るとされ、西アジアからイスラム教と共にヨーロッパへ伝播したとされる。香料用のダマスケナ種は現在ではトルコ、ブルガリア、モロッコにおいて集約栽培が行われている。[8, 9]

編集ノート：クリームやローションなどの香りづけとして多用されている。[2]

S. セイヨウアカネ

Rubia tinctorum L. アカネ科

地中海沿岸の南ヨーロッパや西アジアに分布するつる性の多年草。草丈は 50 ～ 100cm で、7 ～ 9 月に淡黄色の小さな花を咲かす。根にはアントラキノン配糖体（キノン類）などを含み、利胆、強壮、利尿作用などがあるといわれている。

また褐色の根皮をむくと、中は赤く、紀元前 2500 年頃には赤色の染料としても用いられた。

編集ノート：ボディペイントとしても使われることがあった。[7]

T. マンネンロウ

Salvia rosmarinus Schleid シソ科

マンネンロウは和名で、ハーブ名のローズマリーとして一般的に知られている常緑低木。地中海沿岸に分布しており、殺菌効果があることから、西洋では肉料理の香辛料として用いられている。全草にポリフェノールの一種であるロスマリン酸などを含み、健胃・鎮痛・駆風作用がある。

編集ノート：葉の成分が肌荒れに効果があるといわれる。[4]

参考文献

※以下に掲載されている URL は 2023 年 12 月 14 日現在の内容とする。

1. 厚生労働省「日本薬局方」ホームページ

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000066530.html>

2. 『有職植物図鑑』（平凡社）

<https://www.amazon.co.jp/dp/4582839142>

3. 『おしゃれの文化史〈1〉化粧』（平凡社）

<https://www.amazon.co.jp/dp/4582512151>

4. 『化粧品成分検定 公式テキスト [改訂新版]』（実業之日本社）

<https://www.amazon.co.jp/dp/4408338761>

5. 『栽培植物の自然史 II 一東アジア原産有用植物と照葉樹林帯の民族文化』（北海道大学出版会）

<https://www.amazon.co.jp/dp/4832982060>

6. 『週間朝日百科植物の世界』（朝日新聞社）

7. 『民族植物学—原理と応用』（八坂書房）

<https://www.amazon.co.jp/dp/489694836X>

8. 『調香師が語る香料植物の図鑑』（原書房）

<https://www.amazon.co.jp/dp/4562049170>

9. 『花の品種改良の日本史』（悠書館）

<https://www.amazon.co.jp/dp/4865820132>

武田薬品が守り育てる薬用植物園とは



京都市の北東部に位置する京都薬用植物園は、薬用植物を中心に約 2,900 種の植物を保有・栽培している。

1933 年、第一次世界大戦時の医薬品不足により、薬用植物の基礎研究の場として「京都武田薬草園」を創設。1994 年の研究部門の移転に伴い、名称を現在の「京都薬用植物園」に変え、現在は主に薬用植物の収集・保全、栽培・展示、教育・普及などを行っている。

日本国内でも希少な植物を多く育てているため、薬剤師などの専門家のほか競合他社の研修なども引き受けている。また、環境教育の支援活動にも力を入れており、年に数回、一般の方が誰でも参加できる研修会（応募者多数の場合は抽選）を実施している。

漢方処方園

代表的な漢方薬に配合される植物を処方ごとにまとめて植栽している。また、厚生労働省が承認する一般用漢方製剤 294 処方で使用されている生薬の中で、配合頻度が高い順に薬用植物を展示するなど、薬用植物園ならではのユニークな工夫がみられる。



ツバキ園

各地に伝わる古い品種を中心に、500 品種余りのツバキを植栽。江戸時代に作出された品種のほか、昭和 30 年代から京都にゆかりのある寺院から譲り受けた希少な品種を栽培・展示している。

温室

熱帯・亜熱帯の薬用・有用植物を約 600 種栽培・展示している。薬用植物ではトウシキミ、カシアニッケイなど、熱帯果樹ではカカオ、サンジャクバナナなど、スパイスではコショウ、バニラなど。世界最大の花「シヨクダイオオコンニャク」を国内 4 例目の連続開花を成功させた。建物の外観は京都の景観条例に従い茶色のペイントが施されている。

武田薬品 京都薬用植物園

〒606-8134

京都市左京区一乗寺竹ノ内町 11 番地

<https://www.takeda.co.jp/kyoto/>

*栽培している希少な薬用植物の保護・保全の観点から研修会以外の一般公開はしていない。

*京都薬用植物園の紹介動画

<https://www.240.takeda.com/exploringroots/01/>